

追慕と慰霊の双曲線

韓国の宗教儀礼と国家儀礼を中心に

ゆずみん

ふみた とみたて

柳 聖旻(翻訳) 古田富建)

1 はじめに

死者に対してどのような態度を取るかは、その人の信仰や死者との関係、死者の生前の活動やそれに対する評価などの様々な要素が影響を与える。また死者がどのように死んだのかも重要な要素である。その死者が寿命を全うしたのか夭折なのか、事故死か病死だったのか。あるいは既婚か子供がいるか、殉教や殉国なのか、家で死んだのか客死なのかなど、死に方やその様相によって死者に対する生者の態度は様々に変化する。

このような死者に対する生者の多様な態度には、死に対する理解だけでなく生者自身がどう生きるかという問

題も内包されている。そこには死者に対する生者の態度、理想的な死や生に対する生者の理解が表れるからである。生者と死者の相互関係をつぶさに見ていくと、生者が死者から影響を受ける側面と、死者に影響を与える側面の両側面がある。

前者がクロースアップされるのが追慕で、後者に属するのは慰霊である。もちろん死者に対する態度には、追慕と慰霊の両側面が複合的に見られるケースがほとんどで、追慕と慰霊はコインの表裏のような関係ともいえる。しかしどちらかをクロースアップすることで、死者に対する理解をさらに深めることができる。追慕と慰霊を双曲線の二つの定点にたとえるなら、どちらか一方をクロ

ースアップするともう一方は自動的に軽視される。例えば生者が死者のために何かをしてあげたいという場合は慰霊の要素が大きくなり、そうでない場合は追慕に重点が置かれることになる。非業の死を遂げた人に対しては慰霊が、殉教者に対しては追慕がクロースアップされるわけだ。本稿では、韓国の諸宗教の死者儀礼や死者に対する国家の公式儀礼が、追慕と慰霊のどちらに重点を置いているのかを見ていきたい。

国家や宗教の死者儀礼で追慕をクロースアップする場合は、死を肯定的に捉えるような雰囲気を作られるが、慰霊が強調されると死は否定的なものとなり、生に対して愛着を生み出すようになる。また次のようなことが言えるかもしれない。国家が国民の愛国心や闘争心を高揚させたい場合は追慕を、国民に平和と和解を促したい場合には慰霊を重視し、国民が平和と和解を求める場合も慰霊を重視するであろう。ある宗教が信者の犠牲と殉教を誘導しようとする場合は追慕を重視し、信者間の友好関係を協調するなら慰霊を大切にす。本稿では、韓国の諸宗教と韓国政府の葬式儀礼および関連法に、このよ

うな論旨を当てはめて考察していく。また韓国宗教の実際や、韓国政府の政策的な立場を理解するというのも本稿の狙いの一つである。

2 韓国宗教儀礼から見た追慕と慰霊

多くの宗教は死後の世界を認めており、死者の靈魂(魂、魂魄、鬼神など)は死後の世界に旅立つとしている。このような宗教的世界観は、葬儀や祭祀(もしくは追慕式、還度儀礼など)に具体的に現れる。

葬儀や祭祀は韓国の諸宗教で重要な儀礼であり、そこから死者に対する追慕や慰霊の文化を観察できる。そこで葬儀や祭祀から追慕と慰霊の意味を考えていきたい。本稿では韓国宗教を代表する民間信仰(巫俗、儒教、仏教、キリスト教(カトリックとプロテスタント))について取り上げる。

(一) 民間信仰(巫俗)

韓国の民間信仰では死を否定的に捉えている。「肥やしまみれの畑に転がってもこの世がいい」「死んで三杯

の酒をもらうより、生きて一杯の酒をもらった方がいい」などのことわざは、それをよく表している。死に対して否定的なイメージが強いと、慰霊の側面がクロスアップされる。特に異常な死を遂げた者（早死、未婚死、客死、自殺など）の冤魂に対する解怨が民間信仰の儀式の中で重要な役割を担う点からも、民間信仰では慰霊を重視していることが分かる。

民間信仰の中で慰霊の側面がよく現れているのは、シツキムクツという巫俗儀礼である。これは正常な死を迎えられなかった者の霊を慰労する儀礼として民間で行なわれている代表的な死者儀礼だが、その式次第や内容は徹底して死者中心に構成されている。ムーゲン（巫俗の宗教的職能者）が死者の霊魂を呼び出し、その霊魂の無念な事情を聞き、死者の願いが何かを探る。これに対して生者（家族など）はその霊魂の願いを聞き入れようとする。願いをかなえることで冤魂は祖霊となり、生者を苦しめたり悪影響を与えなくなると信じられている。またシツキムクツが行われてからは、怨恨を抱く死者も他の普通の死者と同等の待遇を受けられるようになるので、

それ以降は慰霊儀式を行なわなくてもよくなる。シツキムクツのような儀礼を通して死者の遺族や友人は、死者がもたらす災いを防ぎ、生きる意味を見出して元の生活に戻る。異常な死は遺族やその友人の生活を脅かすが、シツキムクツは死者のわだかまりを解き、遺族が日常に戻れるように助ける。シツキムクツは死者のための儀礼（慰霊）であるが、それと同時に生者（遺族）にとっては日常に戻れるきっかけにもなる。死に対して否定的に理解しながら死者の慰霊に焦点を当て、生者が正常な生を回復できるよう助けるシツキムクツには、追慕の概念はほとんどないと見られない。

（2）儒教

韓国人の伝統的な儀礼に最も大きな影響を与えているのは儒教である。「朱子家礼」「四礼便覧」などに掲載されている儒教的な喪礼や祭礼が、韓国の伝統的儀礼の根幹になっている。儒教式喪礼の中で、追慕や慰霊と関連する儀礼は虞祭（訳注：葬式後に霊魂を慰める死者儀礼を指す）からである。虞祭までの儀礼では、奠を捧げるな

ど生者と同じように死者に接しているため、そこから追慕や慰霊の意味を見つけるのは難しい。儒教では、虞祭から追慕や慰霊を探さざるをえない。

虞祭はその形態と時期、その対象によって細かく分類される。その根本的な趣旨は死者への報恩にあり、祀り手が死者の恩に報いようというものである。そのため虞祭では、慰霊よりも追慕の性格が強くなると言わざるを得ない。儀式では、死者の生前の業績や恩徳を称えることに主眼が置かれ、魂魄を呼び飲食を与え饗宴が開かれる。ここでは、魂魄の慰霊というよりも生者が死者の生前を偲ぶことが狙いなので、生者と同じように死者に接する。虞祭の中で祀られる死者は、血縁関係があり一定の代の者に制限され、その儀礼では死者の生前の活動と正常な死が重視されている。

儒教では追慕の側面を強調しているため、死に対して肯定的なイメージが強いといえる。虞祭が吉礼とされるのもこのためである。もちろんその肯定的な死の理解の対象になるのは正常な死だけだ。

（3）仏教

韓国仏教では、霊魂は肉体とは別に存在すると考えられ、葬礼や死者にまつわる多種多様な儀礼が執り行われる。仏教の葬礼である茶毘の儀礼は、死者の霊魂を端座させる「正坐儀礼」、霊魂をあの世に送る「奉送儀礼」、霊魂に新しい服（肉体）を着せる「唱衣儀式」などは、すべて霊魂の存在を前提とした儀礼だ。霊山斎、水陸斎、盂蘭盆斎などの霊魂遷度儀礼は、生者が死者（の霊魂）のために執り行う儀礼である。

茶毘儀式での発願文には、死者の霊魂のための生者の念願がよく表れている。すなわち生者が死者の霊魂が極楽往生できるよう願うのであるが、他の霊魂遷度儀礼でも同様の内容の発願が執り行われる。このような儀礼は現在も韓国仏教の中で重要な儀礼として残っている。またそれは単に生者の血縁関係にある死者だけでなく、全ての衆生の霊魂や餓鬼のためにも行なわれる。そのため韓国仏教の慰霊は個人や家族の範疇を越え、より広い社会的な意味を持っており、死者の生前の活動や業績あるいは死に方とは関係がない。一方韓国仏教では家庭祭祀